

巻 頭 言

第19回体液・代謝管理研究会をお世話させていただきまして誠にありがとうございました。その際、体液代謝管理に関する学術講演、教育講演、シンポジウムをしていただきました先生方には、大変有意義なご講演をしていただきまして厚く御礼申し上げます。また、指定演題として12名の先生方にもご発表をお願いし、誠にありがとうございました。今回、そこで発表された内容を中心に本研究会誌がまとめられましたことは非常に嬉しいかぎりでございます。

この研究会の理念は、会則にあるように侵襲下の生体に関する体液と代謝の問題を総合的に研究し、この方面からの生命維持に関する理論、ベツトサイドでのデータ表示、臨床的活用法などの進歩をはかり、関連領域の医学の発展に寄与することを目的とすることです。体液・代謝管理の進歩が近年の医療の発展に与えた利益の大きさはいまさら改めて指摘するまでもありません。今後も医療分野のいかに問わず、体液・代謝管理の重要性が失われることは未来永劫にわたってないものと思われま

す。しかしながら、近年、手術、外傷、感染、熱傷などが生体に及ぼす侵襲は以前とは比べものにならないほど大きく、かつ複雑化しております。侵襲時の体液・代謝の変動はホメオスタシスを維持するための生体防御反応であり、圧受容体、浸透圧受容体、化学受容体などの神経系によって感知され、神経内分泌系が中心になって調節しております。局所においてはサイトカイン、プロスタグランジン、NOなどの炎症性メディエーターが重要な役割を担っております。今後も変わってくるであろう侵襲の大きさ、その複雑性を十分考慮して体液・代謝管理を行うことが重要であります。また、移植医療や再生医療などの新しい治療法の開発とともに従来は体液・代謝管理の対象として存在しなかった分野も誕生してくる可能性もあります。それと相反して、今後は低侵襲手術にみられるような低侵襲医療も発展してくるものと思われま

す。そのような観点と会則の理念を踏まえ、第19回の研究会では基礎的な理論に関する講演を2題、ベツトサイドでの臨床的活用ということで救急現場や周術期の体液・代謝管理に関する講演を2題、シンポジウムを2題、また、体液・代謝管理の現場で活躍されている先生方に指定演題として12題をお願い致しました次第であります。お陰様で会場も1会場では収まらず、2会場で行うことになり、多くの方々に参加していただきました。

さて、この研究会も来年で20回を迎えることになり、いよいよ新しいスタートを切るわけですが、体液、代謝管理に興味のある若い先生方がどんどん参加されますことを希望し、今後益々発展していくことを切に期待したいと願う次第でございます。

東京医科大学麻酔科学教室

一色 淳